

ナマズにみる象徴現象

—古代エジプト文明と現代アフリカの種族を例として—

萩生田 憲昭

人は身近に存在する特定の魚類の習性や形態を観察し認識することで、国や地域の文化を象徴する表現として、その魚類をみることがある。例えば、日本では地震の前にはナマズが敏感な反応を示すことから、ナマズが「地震を予知する魚」として、知られている。それは、「鯰が水中成分の変化、水流の変化、水面下の物音や電気放射のような幾多の物理現象を触鬚や体側の鋭敏きわまりない神経細胞組織で知覚している」¹と考えられているからである。では、日本以外ではナマズをどのような象徴表現としてみているのであろうか。

そこで、小論では、ナマズが特異な地位を占めている古代エジプト文明と現代アフリカの種族を取り上げて、その一端を垣間見ることにしよう。まず、古代エジプトではナマズが王名の一部に、また文学作品や宗教テキスト等にも記されていることを明らかにしたい。次に、現代アフリカの種族の中には、ナマズが神話的な役割を演じたり、妊娠や出産を促す儀礼に用いられられたりすること等を提示したい。

セレクと呼ばれる王宮の正面を表す矩形の枠が描かれている。この枠内にナルメル王の名前を示すナマズ（古代エジプト語で「ナル」）と鯰（古代エジプト語で「メル」）の象形文字が刻まれている。ここに描かれるナマズ [図1参照]²は現在のナイル河に棲息するヒレナマズ科 *Clarias anguillaris*³ あるいは *Heterobranchus bidorsalis*⁴ 又は *Heterobranchus longifilis*⁵ 3種のいずれかに同定できると言われている。では、この3種を比較してみよう。*Clarias anguillaris* は、触鬚4対、体長約75cm。脂ビレがなく、長い背ビレが存在し、ナイル河全域に棲息している。一方、*Heterobranchus bidorsalis* は、触鬚4対、体長約77cm。長い背ビレと短い脂ビレがある。棲息地はエジプトでは珍しく、スーダンのハルツーム以北の白ナイル河である。また、*Heterobranchus longifilis* は、触鬚4対、体長約72cm。短い背ビレと長い脂ビレがある。棲息地は上エジプトのルクソールからハルツームである。

このパレットに描かれているナマズは、長い背ビ

古代エジプト文明にみるナマズの象徴表現

紀元前3000年頃、上・下エジプトの統一がナルメル王により成し遂げられ、その最初の統一国家出現を示唆する記念的奉納用の化粧版が「ナルメル王のパレット」である。このパレットの表側の第1段には、

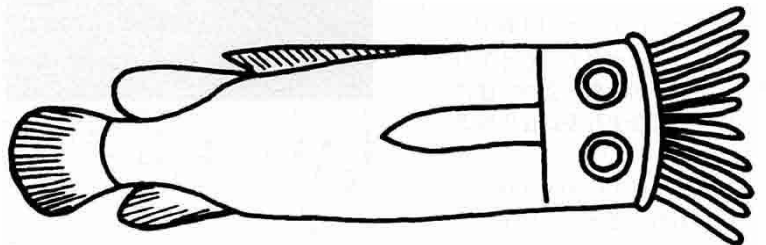


図1 ナルメル王パレットの表側第1段に描かれているナマズ

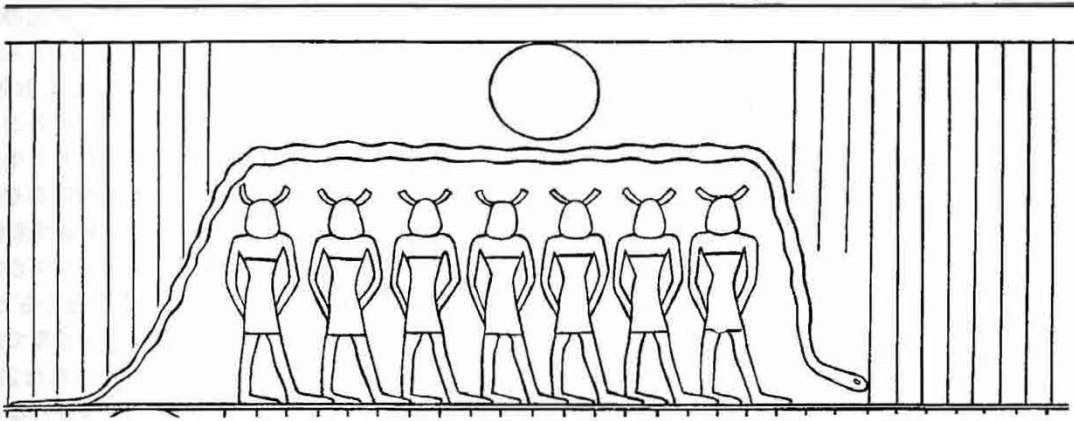


図2 「洞窟の書」の第3洞窟に描かれている頭部がナマズ型をした7神

レと短い脂ビレがあることから、ヒレから推測すると、*Heterobranchus bidorsalis*に同定できるかもしれない。一方棲息地から推測すると、*Heterobranchus longifilis*の棲息地が、特にルクソールと言われており、ナルメル王が上エジプト出身の王であることと関連付ければ、この魚に同定できるかもしれない。

しかし現在ナイル河に棲息する上記の2種類のナマズの触鬚はいずれも4対つまり8本であるが、パレットに描かれたナマズの触鬚は第1段目では10本、第2段目は9本、裏側の第1段目は6本であり、触鬚が全く異なる。さらにナルメル王から約600年後の第5王朝ティのmastaba及び第6王朝メレルカのmastabaの壁画に描かれた魚は、現在の魚と識別し同定できると言われるが、パレットに描かれたこの*Heterobranchus*属は、不思議なことにこれらの壁画には描かれていない⁸。それは神なる王の名前として用いた魚を他の魚と安易に同列に描くことができなかつたのであろうか。つまり、この神聖な魚は、現時点では同定でき得る資料が唯一このパレットであり、また壁画に全く描かれていないことと合わせれば、これ以上の同定作業は困難である。

では、なぜヒレナマズ科のナマズを王名の一部に取り入れたのであろうか。それは、次に記すナマズの神秘的で不可解な習性や形態等に対する畏怖と盲従により生じたのであると推察したい⁷。①鰓の上部に空気呼吸のできる特殊な器官を発達させていることから、乾いた大地でもヒレを利用して身をくねらせながら歩行移動できる。②体型は扁平で、表面は鱗がなくヌルヌルしており、頭部がカブトのように頑丈な骨板で覆われている。③産卵の時期と豊かな実りが約束されるナイル河の増水時期とが一致す

る。④同類のナマズでも飲み込んでしまう程気質は非常に荒く貪食である。

ところで、先に述べたティ及びメレルカのmastabaには神話的世界を暗示させる「牧人の歌」が描かれている⁹が、そこにはナマズが次のように現れる。「西方の神よ。牧人はどこにいるのか。牧人は魚と共に水の中にいる。牧人はナマズと話をする。牧人はオクシリコス魚に挨拶をする。牧人はどこにいるのか。西方の牧人よ。」西方つまり冥界にいる牧人と話す魚になぜナマズが選ばれたのであろうか。それはナマズが夜行性かつ濁った水を好む底棲魚であること、言い換えれば暗黒の世界に住む魚と考えられ、冥界の牧人と話す魚にナマズが選ばれたのではないだろうか。ちなみにこのナマズを*Clarias anguillaris*に同定する学者がいる⁹。新王国時代(紀元前約1550～1069年)になると、宗教テキスト「洞窟の書」と「アムドゥアト」にナマズが現れる。まず「洞窟の書」とは太陽神が生命の担い手として、また暗黒領域における光として、下界の12の洞窟を旅する内容である。ナマズが描かれるのは第2および第3洞窟である¹⁰。第2洞窟の上段では、頭部がナマズ型をした神2対2組と頭部がトガリネズミ型をした神4対4組が棺に入って描かれている。添え書きによると、ナマズは冥界の王オシリスの顕現となったとされる。第3洞窟では、頭部がナマズ型をした7神が聖なる大きな蛇の胎内に居る神々となっている[図2参照]¹¹。この7柱の神々であるナマズは7つの頸椎を表すのではないかとみなす学者がいる¹²。興味深いことには、この7柱の神々にはそれぞれ名称が「オシリス」「アディ(アジュ)」「ケセシィ」「イフェフィ」「レミィ」「セニィ」「メヘヒィ」

と添えられている。この「イフェフィ」がもう一度現れるのが「アムドゥアト」の第8時の場面である。「アムドゥアト」とは太陽神がケプリとして再生するために、12時間を経る地下世界を旅する内容である。この第8時の上段に特徴的な長い触鬚をもつ頭部がナマズ型をした「イフェフィ」と称する神が腰掛けている。E.ホルヌクによると、「この『イフェフィ』は『ナル』に対する代用の名前として使われている名称である」とする¹³。

さらにラムセス3世の墓や4世の石棺等には、前述した頭部がナマズ型をした「ケセシ」「イフェフィ」を含む4柱の神々の図柄が描かれている¹⁴。この神々は夜間の航行において太陽円盤を象徴する球を綱で引っ張る大地の神アケルを助けているのである¹⁵。要するに、宗教テキストでは神聖なるナマズは冥界を夜間航行する太陽神を道案内する役割を担っているのである。超自然界を背景にする新王国時代の作品の「二人兄弟の物語」では、神であるパータの性器をナマズが飲み込んでしまうことが記されている¹⁶。性器を飲むということは、生命誕生を阻止する役割をナマズが担っていると見たい。また、同時代のパピルスにナマズが「夢判断」に用いられている¹⁷。「身を開いたナマズを食べている夢を見る場合、『凶』を意味し、それはクロコダイルに襲われるということを示している」と言われている。さらに神聖化されたClarias属はミイラ化されている¹⁸が、特に医学文書「エーベルス・パピルス」の中には、Clarias anguillarisの平衡感覚に関係がある耳石が挙げられている¹⁹。またナマズの頭骨が民間信仰による霊的交感による治療薬として偏頭痛に処方されていることである²⁰。そして下エジプト第15州ではナマズを忌み嫌っていた²¹が、一方下エジプト第18州ブバステイス神殿の聖なる池では、ローマ時代(紀元後1世紀頃)までナマズが飼われていたことが伝わっている²²のである。

現代アフリカの種族

まず、壮大かつ精緻な神話体系をもつと言われるドゴン族から見ていくことにしよう。マリに住むドゴン族の創世神話による²³と、創造神アンマは、最初の生ある存在であるノンモ・アナゴンナと呼ばれるナマズを創った。神話的な役割を演じるこの魚に見立てているのがニジェール河に棲息するヒレナマズ科のClarias senegalensisである。ナマズはドゴン族では胎児の象徴でもある²⁴。それは水の中にいる

ナマズの状態が羊水の中で体を曲げている胎児の様子に似ていると信じられているからである。さらにナマズには鱗がなく人間と同様すべすべしており、ナマズが口から空気を吐き出す時に音を発することや付帯する呼吸器官によって水の外でしばらく生きることができること等ナマズの習性が人間になぞらえているのである。そのことが、ドゴン族の先行儀礼の一つである結婚式と婚姻の給付にもナマズが関連することになる²⁵。つまり娘が初潮を迎えると、男は胎児の象徴であるナマズ2匹と子宮の象徴であるヒョウタンを娘の母親に贈る。娘は贈られた2匹のナマズを頭からまるごと食べなければならないし、それによって彼女の胎内で「ただちに胎児が形成される」と信じられている。しかし彼女が、なかなか妊娠しない場合には、腹にじかにナマズの背骨をあらわす傷痕を「生殖を容易にするために」つけられるという。また死の儀礼にもナマズが関連することも興味深い。なお、ナイジェリアのティヴ族も出産を促すために女性の腹部に「ナマズ」を象徴する傷痕を行うと言われるが、近年の研究では傷痕はさらに深い宗教的意味をもっていると考えられている²⁶。

次に、ドゴン族と歴史的文化的にも深い関係があるマリケ族やバンバラ族等マンデ系民族は、神話的な役割を、ニジェール川に棲息するHeterobranchus bidorsalisとClarias senegalensisという魚に与えている。創世神話によると、水の精霊ファロの化身である2つの魚、つまりマンノゴ・ブレとマンノゴ・フィが天から降りてきたという。このマンノゴ・ブレがHeterobranchus bidorsalisであり、ファロ自身を代表し、地上や水中でファロと人類の仲介者となったことから、この魚が人々にとって禁忌とされるのである。一方マンノゴ・フィがClarias senegalensisであり、ファロの息子である人間の原型になる²⁷。なお、このHeterobranchus bidorsalisに関して興味深い伝承がある。それは今日、ソモノ族とボゾ族によって厳しく尊守される近親婚の禁止は、本来、捕まえても食べてもいけないこの魚に関する禁制をボゾ族の先祖たちが破ったという伝え²⁸からである。このボゾ族は、丸木舟の縁にポリヨ(Polyo)と言われる記号をバンバラ族に知らせるために3つ描いている。ポリヨはHeterobranchus bidorsalis及びlongifilisを示唆し、バンバラ族の一親族集団であるコウリバリ族(koulibali)は、この2種類の魚を禁忌としてい

る²⁹。

さらにドゴン族とそれ程遠くない地域に住むグルマンチュ族は、ドゴン族同様に人間の胎児をナマズになぞられる³⁰。というのは、ナマズも胎児もともに水の中で成長するからである。つまりナマズは湿地の水、胎児は羊水の中である。それ故、ナマズが女性の胎内に入るとすぐに胎児に変わると信じられている。特にこの部族は、*Clarias anguillaris* に対して強い関心をもっている。それは、この魚が水の外でもしばらく生きることができ、鱗がなく滑らかな表面が人間の体を連想するからだ³¹という。

ザイル（現コンゴ民主共和国）のンガンドゥ族は、*Heterobranchus longifilis* を幼児に対する、及び乳幼児を持つ両親に対する食物規制の対象としている³²。同じザイルのソンゴラ族エニヤ支族は、*Heterobranchus longifilis* を4つの生長段階に分ける“出世魚”と見ている³³。また、エチオピアのコエゲ族も5段階に分ける出世魚として、*Clarias gariepinus* を見なしている³⁴。

なお、14世紀～19世紀末に栄えたベニン王国（現ナイジェリア共和国）で作られた装飾板にナマズが描かれているのが少なくない。その一つに外側に曲がった足が2匹のナマズで表されているいわゆる「魚足王オバ・オヘンの青銅製装飾版」がある³⁵。ベニンの伝承によると、ナマズは川の神オロクンの平和・繁栄・多産の象徴でもあり、神オバの領域である陸地と神オロクンの領域である水中との間を行き来する生き物であるとされる。ちなみにこのナマズを何種類かのナマズ類に同定することが試行されている。その中で *Clarias anguillaris* を挙げているが、その理由は、この魚が特殊な呼吸器官を備えているため水から出て陸上でもしばらく生きることができ異常な力を所有するからだ³⁶とする。

以上、古代エジプト文明と現代アフリカの種族が、ナマズをどのように見てきたのか探ってみた。古代エジプトでは、ナマズが神聖な魚であるからこそ禁忌にもなる。また、生命誕生を阻止する一方、太陽神の復活を手助けするという両義性も持ち合わせているのである。現代アフリカの種族でも、ナマズが神聖な魚であるとともに禁忌にもなる。また人間の胎児の象徴でもある。上記の通り、現時点で調べた限りにおいては、アフリカ全域には数多くのナマズ類が棲息しているが、その中でもヒレナマズ科が特異な地位を占めていることがわかる。では、なぜこのヒレナマズ科が、そのようにみられてきたの

か。それはこの魚が魚類にもかかわらず、陸上でも短時間なら生き長らえることができる神秘的な魚であるため、古代エジプト及び現代アフリカの種族にとって、王名・文学作品・宗教テキスト・創世神話・儀式等に用いる特別な存在であったからだと思いたい。

[付記]

以下の方々に対しては、私の質問に関して親切にもご回答を頂き、記して感謝いたします（敬称略）。小島瓊禮（琉球大学）、小早川みどり（九州大学）、小山茂雄、坂井信三（南山大学）、佐藤哲（南伊豆海洋生態ラボラトリー）、立入健、周達生（国立民族学博物館）、竹沢尚一郎（国立民族学博物館）、松田凡（京都文教大学）、村井久之（さいたま水族館）、山岡耕作（高知大学）。

注

- (1) C. アウエハント、小松和彦・中沢新一・飯島吉晴・古家信平訳 1989『鯰絵』せりか書房、96頁。
- (2) Brewer, D.J. and Friedman, R.F. 1989 *Fish and Fishing in Ancient Egypt*, Aris&Phillips, p.63, fig.3.21.
- (3) Kees, H. 1977 *Der Götterglaube im alten Ägypten*, Akademie-Verlag Berlin, S.68-69.
- (4) Gamer-Wallert, I. 1970 *Fische und Fischkulte im alten Ägypten*, Wiesbaden, S.9-11.
- (5) Gaillard, C. 1923 *Recherches sur les poisons représentés dans quelques tombeaux égyptiens de l'Ancient empire*, MIFA●51, Kair●, pp.57-60.
- (6) Gamer-Wallert, I. *op.cit.*, S.140, Tafel.I, II.
- (7) Brewer, D.J. and Friedman, R.F. *op.cit.*, pp.60-63; Boulenger, G.A. 1965 *The Fishers of the Nile*. In Anderson' Zoology of Egypt. Neudruck, pp.278-305. Burgess, W.E. 1989 *An Atlas of freshwater and Marine Catfishes*, T.F.H. publications, pp.135-142.
- (8) Altenmüller, H. 1973, "Bemerkungen zum Hirtenlied des Alten Reiches," *Chronique d'Égypte* 48, S.211-231; Hollis, S.T. 1978 "On the Nature of Bata, the Hero of the Papyrus d'Orbiney," *Chronique d'Égypte* 59, pp.248-257.
- (9) Handoussa, T. 1988 "Fish offering in the Old Kingdom," *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts für ägyptische Altertumskunde in kairo* 44, S.108, n.18.
- (10) G. ハート、阿野令子訳 1994『エジプトの神話』

- 丸善、110頁。; Piankoff, A. 1954 *The tomb of Ramesses IV*, New York, pp.55-76.
- (11) Piankoff, A. *op.cit.*, p.68, Fig.12.
- (12) Barguet, P. "Le livre des Cavernes et la re-constitution du corps divin," *Revue d'égypte*, p.27.
- (13) G. ハート、前掲書、102頁; Hornung, E. 1963 *Das Amduat*, Wiesbaden, vol. I. S.145.
- (14) Capart, J. 1939 "Cultes d'el KAB et Préhistoire," *Chronique d'Égypte* 14. pp.213-217.
- (15) Gamer-Wallert, I. *op.cit.*, S.116, n.321,117.
- (16) Hollis, S.T. 1990 *The Ancient Egyptian Tale of Two Brothers*, University of Oklahoma press, pp.103-105.
- (17) *ibid.*, pp.111-112.
- (18) Gamer-Wallert, I. *op.cit.*, S.119.
- (19) Dawson, W.R. 1932 "Studies in the Egyptian medical Texts," *The Journal of Egyptian Archaeology* 18, p.150.
- (20) Gamer -Wallert, I. 1986 "Wels," *Lexikon der ägyptologie* IV, Wiesbaden, S.1210.
- (21) Montet, P. 1950 "Le Fruit Défendu," *kēmi* 11, p.99.
- (22) Kees, H. *op.cit.*, S.69.
- (23) M. グリオール & G. ディテルラン、坂井信三訳 1986『青い狐』せりか書房、44、107、138頁。
- (24) Calame-Griaule, G. 1965 *Ethnologie et langage*, Paris, Gallimard, pp.95-96.
- (25) 竹沢尚一郎 1987『象徴と権力—儀礼の一般論理』勁草書房、114、120、124-125頁。; Griaule, M. 1955 "Rôle du silure *clarias senegalensis* dans la Procréation au Soudan français," *Afrikanistische Studien* 26, pp.301,303,308; Dieterlen, G. 1973 "l'image du corps et les composantes de la personne chez les Dogon," *La notion de personne en Afrique Noire*, Ed.du CNRS, pp.227,229.
- (26) 和田正平 1982「黒いアフリカの皮膚装飾—傷痕刺青 ボディ・ペインティング—」『化粧文化』6号、23-24頁。; Bohannan, P. 1956 "Beauty and scarification Amongst The Tiv," *Man* no.129, p.120.
- (27) 阿部年晴 1994『アフリカの創世神話』紀伊國屋書店、197-200頁。; Dieterlen, G. 1957 "The Mande Creation Myth," *Africa*, vol.27, p.126, n.3.
- (28) Dieterlen, G. *op.cit.*, p.135.
- (29) Griaule, M et Dieterlen, G. 1949 "L'agriculture rituelle des Bozo," *Journal de la Société des africanistes* 19, pp.212-213, n.2.
- (30) Cartry, M. 1979 "Du village à la brousse ou le retour de la question. A propos des gourmantché du Gobnangou Haute-Volta," in *La Fonction symbolique. Essais d'anthropologie réunis par Michel Izard et Pierre Smith*, P.270.
- (31) Cartry, M. 1968 "La calebasse de l'excision en pays Gourmantché," *Journal de la Société des africanistes* 38(2). pp.189-191, 209-213.
- (32) 武田淳 1987「熱帯森林部族ンガンドゥの食生態—コンゴ・ベズンにおける焼畑農耕民の食性をめぐる諸活動と食物摂取傾向—」和田正平編集『アフリカ民族学的研究』同朋舎、1136-1137頁、付表21。
- (33) 安溪遊地 1982「ザイール川とタンガニイカ湖漁撈民の魚類認知の体系」『アフリカ研究』21号、24-31頁。
- (34) 松田凡 1991「北東アフリカの大地から 川がもたらすゆたかな暮らし」『季刊民族学』58号、18-24頁。
- (35) 川田順造 1992『口頭伝承論』河出書房新社、493-495頁。
- (36) Ben-Amos, P and Rubin, A. (eds.) 1983 *The Art of Power, the Power of Art: Studies in Benin Iconography*, Museum of Cultural History, UCLA, Los Angeles, pp.64, 89-93.

(はぎうだ のりあき
日本ナイル・エチオピア学会会員)